

オオハムとシロエリオオハムの識別

榎本秀和（鴻巣市）

日本で記録のあるアビ目アビ科の鳥は4種類ある。そのうち、アビやハシジロアビは、その大きさや外観から識別は比較的容易なものと思われる。問題はオオハムとシロエリオオハムの識別であるが、「知ってる人は知ってたのね～」というお話。

◇まずは図鑑を

『フィールドガイド日本の野鳥』（以下、FGと略記する）の該当頁を開いてみよう。開いてすぐわかることは、オオハムとシロエリオオハムがたいへんよく似ていること。欧米の図鑑では同種と扱われる場合も少なくない。解説文を読んでみると、いちおう両種の見分け方についての説明はある。イラストのほうも夏羽でなら、かろうじて両種の相違が見いだせる。

しかし、これだけでは、よほど条件が良くないかぎり野外での識別はむずかしい。だいたい、冬鳥として渡来するというのに「冬羽ではほとんど見分けられない」というのでは困ったものだ。

瀬戸内海沿岸にはアビ類を利用した漁法があるが、鳥の種類としてはシロエリオオハムが多いというけど、どうやってそれがわかったんだろう、などと考えてしまう。

◇ところが先日のこと

『日本動物大百科』第3巻「鳥類I」（平凡社刊）のアビ目の頁を見ていて「ヘェ～」とひとり唸ってしまった。参考までにその全文を掲げる。

「冬に全国の沿岸に渡来。野外で見分けるのはむずかしいが、シロエリオオハムは夏羽、冬羽とも、オオハムにある脇腹の後部の白斑がなく、冬羽では、あごに黒い線がある。」（同書12頁の写真のキャプション）

このように、FGに出ていないオオハムとシロエリオオハムの識別点が明示されているのである。あらためてFGを見てみると、シ

ロエリオオハム（夏羽）のほうのイラストの脇腹後部に白色部分があって、上記の記事とは矛盾する。

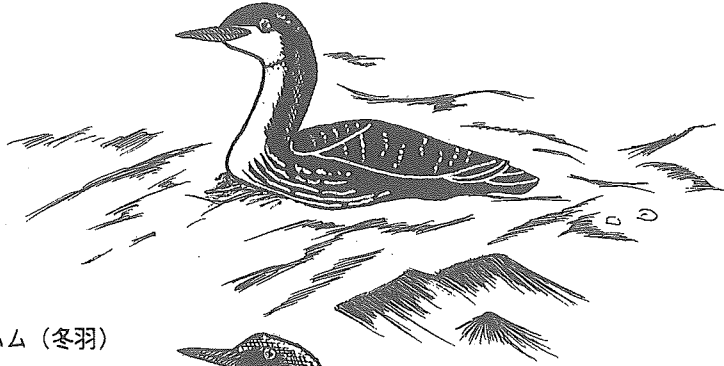
◇図鑑を総動員

こうなったら我が家にある図鑑を総動員。『SEABIRDS - An Identification Guide』、『SEABIRDS OF THE WORLD - A Photographic Guide』（共にPeter Harrison著）には、白斑についての記述はあるがあごの線については触れられていない。

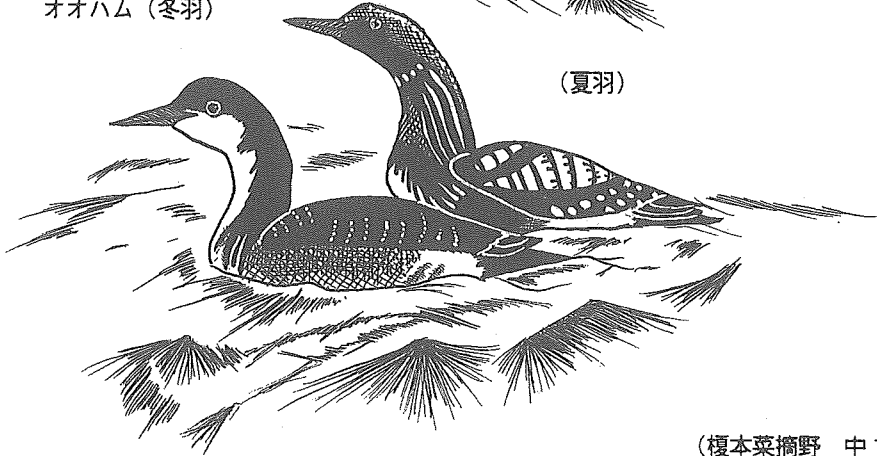
次に『A Field Guide to the Waterbirds of Asia』（日本野鳥の会刊）を取り出してみる（余談であるが、この図鑑のイラストは谷口高司氏が担当されている。FGのイラストよりも私の好みに合っているので、私は日頃の探鳥にも活用しているが、とりわけシギ類の観察に際してはお勧めしたい一冊である。日本語版はない）。これを見て驚いた。何とこの図鑑では、『日本動物大百科』の記事と同様にオオハムとシロエリオオハムがちゃんと描き分けられているではないか。

さらに調べてみると『Field Guide to the Birds of North America』（National Geographic Society刊）にもあごの線の記述が見られる。なお、この北米の図鑑によれば、オオハムにはシベリア型とヨーロッパ型とがあり、後者の夏羽の前頸はシロエリオオハムと同じように光沢のある紫色ということである。ちなみに、オオハム（Black-throated Diver）しか見られないヨーロッパの図鑑では、夏羽の前頸の色はたいして問題ではなさそう、文字どおりBlack-throatedほどの記述だけであった。

シロエリオオハム（冬羽）



オオハム（冬羽）



（夏羽）

（榎本菜摘野 中1）

◇次はしっかり見るぞ

典型的な夏羽などなかなか見られはしないのだから、冬羽の確実な識別にヒントを与えてくれた『日本動物大百科』の記事には感謝しなければならない。それにしても、ほかの図鑑もよ〜く読んでいれば書いてあることだったのに。これでは自ら不勉強の証明をしてしまったようなものだ。

プアな体験を披露するようだが、筆者はこれまでに4回オオハム（たぶん）を観察したことがある。太平洋側と日本海側でそれぞれ2回、1羽ずつ。太平洋側は季節は冬、場所は千葉県銚子。日本海側は季節は春、場所は石川県輪島港沖で、こちらは船上からの観察だった。

その中でいちばん印象に残っているのは、銚子の外川漁港での遭遇。岸に上がっている

ところに出くわしたのだが、オオハムは慌てて（といってもノソノソとだが、あの体型では精一杯の速さだろう）海へ入って行った。潜水時間の長さや、潜水しながら進む距離の長さにびっくりしたものだ。

海鳥は、自分が海ナシ県に住んでいるためか、出会えたときの感激は大きいものがある。どこへ行けば見られる、という情報も入って来ないからかもしれない。前述の瀬戸内海のアビ類にしても、広島県支部の方に伺ったところ、そう簡単には見られなくなったということである。

いずれにしても、今度オオハムに遭遇した時には、この新知見を基に、より確実な識別を試みたい。

というわけで、「知ってる人は知ってたのね〜」という一席、お粗末。

本稿は、この年末年始の休みに執筆した。年明け早々に入稿し、3月号掲載が決まった直後に発売された『BIRDER』2月号を見て驚いた。「アビ類観察の楽しみ」（木村裕一氏文）という記事が出ていたからである。こちらの一読もお勧めする。

更に、日本海重油汚染でのオオハムたちの悲しい知らせも重なり、複雑な心境である。